骨気洞達

藤森大雅（大節）
Hiromasa（Daisetsu）Fujimori

清の劉熙載の書論『書概』に次の一節がある。

書の要は、骨気二字に統べらる。骨気にして洞達すと曰う者、中の透るを洞と為し、辺の透るを達と為す。洞達すれば則ち字の疎密・肥瘦皆善し、否らざれば則ち皆病めり。

（書之要、統於骨氣二字。骨氣而曰洞達者、中透爲洞、邊透爲達。洞達則字之疎密肥瘦皆善、否則皆病。）

劉熙載は書の要点に「骨気」を挙げている。「骨気」は書美の根源的要素であり、袁昂の『古今書評』を初出として、それ以降の書論にも頻出する術語である。「骨気」は「内面から溢れる生命力」を意味し、その「骨気」が「洞達」すれば文字の「疎密」や「肥瘦」はうまくいき、「洞達」しなければ生命力は失われてしまうという。その意味では「洞達」も重要であると言える。「洞達」とは隅々まで行きわたることであるが、「洞」は「中の透る」、「達」は「辺の透る」ことであり、線の内外に力強さが表現されることである。

また、劉熙載は「筆画」「字形」「章法」からも次のように記している。

凡そ書は筆画 堅にして渾なるを要す。体勢 奇にして穏なるを要す。章法 変にして貫なるを要す。

（凡書筆畫要堅而渾、體勢要奇而穩、章法要變而貫。）

総じて書は、筆画は「堅」（力強い）、「渾」（充実する）、字形は「奇」（めずらしい）、「穏」（落ち着いている）、章法は「変」（変化）、「貫」（一貫する）でなくてはならないという。これらの要素は、先に引いた「骨気洞達」と同じ書の要点であり、「骨気洞達」を理解する上でも重要である。本作はこれらの要素を手掛かりに、「骨気洞達」の実現を目指して制作したものである。以下、筆画、字形、章法から述

べていく。

【筆画】

「堅」の趣を表現するため、執筆は懸腕撥鐙法、用筆は直筆蔵鋒を主体とし、紙面に筆を食い込ませるイメージを大切にした。同時にこれらの執筆法、用筆法は、線の内側（中）と外側（辺）に力を働かせるためには重要であり、ここに遅速緩急を意識することで筆勢がでるよう工夫した。また併せて墨量を豊かにすることにより「渾」の趣が表出されることを狙った。

【字形】

文字本来に備わる字形を基本とすることで「穏」の趣を表現し、二行目の「處」、三行目の「人」など、要所要所に変化をつけることで「奇」を意識した。一字の中では偏旁（上下、左右）のバランスや疎密の変化を強調した。

【章法】

全体構成としては行間、字間を整え「貫」の要素を意識した。「處」「人」の字形のデフォルメにより、「変」の要素を加味しようと試みた。全体的に墨が付きすぎたため、渇筆の効果は狙いとはかけ離れてしまった。

本作では劉熙載の書論の一節を参照し作品制作にあった。総合的に言えば、筆画の力強さや充実した趣を意識して制作にあたることができたが、字形や章法については更なる工夫が必要であると思われる。作品を構成する要素は多岐にわたる。作品制作の過程では、時にその要素に翻弄され、制作意図を見失うことも少なくない。古来より書の要点に挙げられる「骨気洞達」を念頭に置いた作品制作は、書の本質に立ち返り、再確認するための良い機会となった。これを機に、書論への理解を深め、自己制作の作品に還元できるような工夫を計りたい。

［釈文］

竹林多処聚人家。

［用具用材］

筆…和筆。純羊毛筆。

墨…和墨と墨液を混合したもの。

紙…本画箋。

［作品寸法］

縦六九cm×横七〇cm

竹林多処聚人家

69×70㎝